

〈資料〉

明刊本『唐宋白孔六帖』「孔帖」補遺

山田 英雄

南宋の初め、紹興の初年（一一三一）頃、孔伝は唐の白居易の『白氏経史事類』（別名『六帖』。後に『白氏六帖事類集』と題する。）に続けて、『六帖新書』を編んだ。この書は乾道二年（一一六六）に、韓仲通によって『孔氏六帖』（三十卷）と題して刊行された。その後、南宋の末期に至って、『孔氏六帖』三十卷は『白氏六帖事類集』三十卷と合併して、『唐宋白孔六帖』一百卷として刊刻された。この合刻本が出て以後、元明清の世に、両書とも単行の書は刊行されることがなく、伝本はきわめて稀となった。合刻の宋刊本も稀で残本しか知られていないが、これには明の嘉靖年間の翻刻本があり、比較的容易に見ることができる。これは近年台湾で影印され、『白孔六帖』と題して新興書局より発行されている。

今日『孔氏六帖』を見るには、この影印本に依るのが便利であるが、利用に際しては宋刊本の単行『孔氏六帖』と合刻『唐宋白孔六帖』の存在に注意しておかなければならない。

まず『孔氏六帖』は、わずかに台湾の故宫博物院に二十九卷を存する（巻一一を欠く。巻一一は合刻本の巻三六―三九に当たる。）以外には、北京図書館に巻一一の零本があるのが知られるのみである。

次に宋刊の『唐宋白孔六帖』は、静嘉堂文庫に三十八卷（卷一―三八、うち卷一、二、一三、一四、一七、一八、二三―二六、三三、三四、三七、三八は旧抄）を存し、台湾の国立中央図書館には四十二卷（卷三一―四〇、三九―四三、六五―七七、八九―九四）を存するが、破損、欠葉が多い。そのほか上海図書館に二卷（卷三九、四〇）がある。なお北京図書館には宋刊本に依った明人の抄本一百卷があるという。

右の両本については、阿部隆一『増訂中国訪書志』（汲古書院、一九八二年）、胡道静『中国古代の類書』（中華書局、一九八二年）の記述が参照できる。

『孔氏六帖』の資料的価値について注意するものとして、『国立故宫博物院宋本図録』（国立故宫博物院、一九七七年）に載せられた解説がある。この解説は、『孔氏六帖』によって明刊本『白孔六帖』を校すると、明本のおびただしい誤りを正すことができることに言及し、卷一の「天」の門について前者が後者の誤りを正す十数の例を列举して、この書が後世の『白孔六帖』の伝本を校正する最良の資料であることを強調している。実際、『孔氏六帖』と明刊本『白孔六帖』とを対照してみると、この解説の指摘の正当さがよく理解できるのであるが、両本の差異は引用文の正誤にのみにとどまらない。両本の間には、特に注文の記載に相当の差異が存在する場合がある。明刊本は単行本に比べて、著しく簡略にしていることがある。例えば、明刊本卷四、「寒食」門の「寒食上墓禮絶無文」の条の注文は「近代相承浸以成俗明皇詔」の十一字であるが、単行本には「俗」の字の後に、「士庶不合廟祭何以用展孝思宜許上墓同拜禮於塋南門外奠祭徹饌浼泣辭食餘仍他處不得作樂仍編入五禮永爲定式」の五十一字がある。したがって、流布している明刊本『白孔六帖』にのみ依ってそれをそのまま『孔氏六帖』と同様にとらえるのはきわめて危険であり、われわれは本書の利用に際しては宋刊単行本を参照してその異同を確認し正誤を判定する必要があることに留意しておかなければならない。

このように明刊本『唐宋白孔六帖』の使用には注意が必要なのであるが、宋刊単行の『孔氏六帖』との差異は、同一の条の正文と注文の文字の異同、簡繁にとどまらない。両本を対照してみると、各門の中の条文の配列順序に一部違いが見られる。そのほかには重大なこととして、明刊本には、六十を超える箇所において相当数の条文の脱漏があることが確かめられる。一箇所一条ないし数条を脱するのが多いが、中には十数条を脱している箇所もいくつか見られ、一番甚だしい箇所では三十五条にも及んでいる。一門全体が脱落している箇所もある。そのほか、前条の注文と後条の正文が脱して前条の正文に後条の注文が付いたものなどがある。明刊本にはこのような遺漏があることを知らなければならぬ。

本稿は、宋刊単行の『孔氏六帖』（故宫博物院蔵、二十九卷、マイクロフィルムを使用した。）と明刊合刻の『唐宋白孔六帖』（新興書局発行影印本を主に使用、適宜版本を参照した。）との対照によって明らかとなった差異の中でも、特に明刊本の脱漏を取り上げて、どこにどのような条文が脱落しているのか、調査の結果を提示して、今後の利用に便宜を与えようとするものである。なお、明刊本に存して宋刊単行本に見えない条文もいくつかあり、両本の間に出入があるものについても、合わせて記録した。但し、注文のみが脱漏しているものは取り上げていない。

記載の要領は次のごとくである。

一、脱漏等の存在する箇所ごとに、◇印をもって標示し、その下に位置を指示する。

◇ 一・二七表 三八 「陰陽運行」の前

これは、明刊本『唐宋白孔六帖』巻一の第二七葉の表、影印本の三八頁、陰陽運行の条の前に、次行以下に掲

げる条文が脱漏していることを示す。

位置を示す条文を挙げるには、正文のみを記し、注文は省く。正文が六字以上の場合は文頭の五字のみを記す。

二、脱漏している条文は、各条まず正文を記し、二字空けて注文を記す。（原本では注文は小字双行である。）

三、条文が複数の場合は毎条改行する。

四、その他、必要に応じて注記を加える。

五、字体は常用漢字を含めて通用のものを採用し、異体字等是一部原文と異なる場合がある。

◇ 一・二七表 三八 「陰陽運行」の前

天運周 明皇更詔一行等更鑄渾天銅儀圓天之象具注水激輪一晝夜而天運周

◇ 二・六表 四二 「芒碭雲一去」の前

雲光 同上水深雲光廓

◇ 二・八表 四三 「天有四時五」の前

壤廡舍 鄭虔史爲置廣文館以爲博士就職久之雨壤廡舍有司不復修完寓治國子館自是遂廢

◇ 二・二四表 五一 「京師大雨雹」の前

害麥禾及桑 永淳元年五月壬寅定州大雨雹害麥禾及桑同上

殺燕雀 證聖元年二月癸卯滑州雨雹殺燕雀同上

◇ 二・二四表 五一 「雨雹如拳」の前

大雨雪而雹 貞元十七年二月庚戌大雨雪而雹

◇ 二・二八表 五三 「霜厚數寸」の条、注文が脱漏。

五行志元和八年十月東都大寒霜厚數寸

右に続いて、後条の正文が脱漏。

盛夏隕霜

「霜厚數寸」についている五行志證聖元年六月云々の注文は、この正文につくものである。

◇ 二・三〇裏 五四 「露裛思藤架」の前

夜深露氣清 晚呈漢中王

◇ 三・二六裏 六七 「晚枝多露蟬」の前

爽景清氣 唐文粹呂溫由鹿賦爽景清氣

◇ 四・三裏 七二 「蠻夷長老怨」の前

長風入短袂内手如懷冰 李白贈新平少年

凍埋蛟龍 南浦縮寒刮肌膚北風利杜甫苦寒行

玄猿口噤不能嘯 白鵠翅垂眼流血同上

◇ 四・一九表 八〇 「三月三日天」の前

上踏青鞋履子 唐虞範公饋餉儀凡三月三日上踏青鞋履子

◇ 六・八表 一〇六 「千崖無人萬」の前

踰臨 同上題瑯琊寺詩踰臨懸壑絕

◇ 六・二二表 一一三 「鑿潭通漕」の条

この条の注文は「觀」の字までである。この後に以下の条が脱漏している。「而」の字以下は脱漏している最後の条の注文に続く。

鑿山開車 李泌貞元元年拌陝虢觀察使始鑿山開車道至三門以便鑿漕

自舉一囊 韓滉始漕船臨江滉顧僚吏曰天子蒙塵臣下之恥也乃自舉一囊將佐爭負之

通渠 劉晏領東都河南江淮轉運使時大兵後京師米□千錢禁膳不兼時旬農按穗以輸晏輦洛見宇文愷梁公堰斯河爲通濟渠視李傑新隄盡得其利病乃移書於宰相元載以爲大抵運之利與害各有四（□一字判讀不能）

歲致四十萬斛 載方內擅朝權既得書即盡以漕事委晏故晏得盡其財歲輸始至天子大悅遣衛士以鼓吹迓東渭橋馳使勞曰卿朕鄼侯也凡歲致四十萬斛自是關中雖水旱物不翔貴矣

河漕不通 穆寧遷鄂岳沔轉運當是時河漕不通自漢沔徑商山以入京師

旁流爲大敖受粟 崔郾爲虢州觀察使詔賦粟輸太倉者歲數萬石民困於輸則又輦而致之河郾乃旁流爲大敖受粟實而注諸漕民悅忘輸之勞

漕運本濟關中 權德輿上陳闕政言漕運本濟關中若轉東都以西緣道倉廩悉入京師督江淮所輸以備常數然後約太倉一歲計斥其餘者以糴于民則時價不踊而蓄藏者出矣

浚七里港 王播爲淮南節度使浚七里港以便漕引後賴其利

以十月爲漕 李德裕徙劍南西川舊制歲抄運內粟瞻黎嶺州起嘉眉道陽山江而達大度乃命餉諸戍常以盛夏而至地苦瘡獨輦夫多死德裕命轉叩雅粟以十月爲漕始先夏而至以佐陽山之運饋者不涉炎月遠民乃安

命在所令長兼董漕 裴休進中書侍郎大和後歲漕江淮米四十萬斛至渭河倉者纔十三舟楫償敗吏乘爲姦冒沒百端劉晏之法盡廢休分遣官詢按其弊乃命在所令長兼董漕褒能者謫怠者由江抵渭

築障 韋景駿歷肥鄉令縣北瀕漳連年泛溢人苦之舊防迫漕渠雖峭岸隨即壞決景駿相地勢益南千步因高築障水至隄趾

輒去其北燥爲腴田又維艚以梁其上而廢長橋功少費約後遂爲法

議漕輸事有名當時 王仲丘祖師順仕高祖議漕輸事有名當時

儲餉畢給 高駢鎮安南由安南至廣州江漕梗險多巨石駢募工勦治由是舟濟安行儲餉畢給

置河陰集津三門倉 裴輝卿同中書門下平章事充轉運使於是置河陰集津三門倉引天下租繇盟津汴河而西三年積七百

萬石省運費三十萬緡或曰以此緡納於上足以明功答曰是謂以國財求寵其可乎敕吏爲和市費

班宏主漕歲得江淮米五十萬斛 餘見讒門

高祖太宗之時漕運簡 唐史食貨志高祖太宗之時用物有節而易瞻水陸漕運不過二十萬石故漕運簡

轉漕東南之粟 唐都長安而關中號稱沃野然其土地狹所出不足以給京師備水旱故常轉運漕東南之粟

使江南之舟不入黃河黃河之舟不入洛口 同上裴輝卿上便宜可於河口置武牢倉鞏縣置洛倉使江南之舟不入黃河黃河

之舟不入洛口（以下、而咸陽灞滻太原云々と続く。）

◇ 七・一六裏 一二六 「潺湲瀉幽磴」の前

除三虫 華陽雷平山有田公泉飲之除腸中三虫用以浣衣力勝灰汁出酉陽雜俎

◇ 八・二一表 一四三 「置虞鄉」の後

合刻本は「縑去馬來」以下、終わりの「遇我薄」まで五条あるが、単行本はこれらを含まず、一六条ある。

絹八萬 王毛仲市死畜絹八萬募嚴道僦僮千口爲牧圉

鵝溪絹 地里志陵州土貢鵝溪絹

濫縑 叛臣贊□正元以後中官市物都下謂之宮市取濫縑惡布紅紫之倍其估裂以償直（□一字判読不能）

輕縑 素練張說論文

孝子縑 韓思彦客汴州張僧徹者廬墓三十年詔表其閭請思彦爲頌餉爲二百不受時歲凶固請爲受一匹命其家曰此孝子

不可輕用

霜縑 可憐物色阻攜手空展霜縑懷九詠韓愈寒食日出遊

繫南山樹 玄宗嘗召王元寶問其家貲對曰臣請以一匹縑繫陛下南山樹樹盡而縑未窮出南部新書

賦縑非時 韓琬先天中賦縑非時於是穀賤縑益貴丁別二縑人多徙亡

一百萬疋 鄭注誅後縑一百萬疋它物可知南部新書

龍油縑 大中時女王國貢龍油縑形製特異與常繒不類云以龍油絲織出雨不能濡上

豈聞一縑直萬錢 杜甫憶昔詩

賞三百疋 太宗令百官上書言事常何令馬周陳便宜二十餘事奏皆合旨上條而問何何曰非臣能之客馬周所作也每與臣

未嘗不以忠孝爲意上即召拜直門下省賞何三百疋

陽城置縑 隱中條山山東節度府聞城義者發使遺五百縑戒使者不令返城固辭使者委而去城置之未嘗發會里人欲葬親

貸於人不能得城舉縑與之

賜絹 世祖子博又爲尚書驕奢不法其弟奉慈亦荒縱皆爲帝所鄙嘗曰王等昵小人專爲不軌先王墳典不學何以爲善各贈

市書絹二百疋媿切之

寶參 宣武劉士寧餉參絹五千疋以外交戎臣欲殺參陸贄以殺之太重貶驩州

◇ 八・二一裏 一四三「綿」の門

合刻本には一条も見えないが、単行本には「縣 絮附」の門に以下の十条を載せる。

沃州之縣 北狄傳渤海俗所貴者曰沃州之縣

六兩爲屯 百官志織染署縣六兩爲屯

火蠶絲 唐杜陽編懿宗咸通九年同昌公主出降有火蚕絲出炎洲絮衣一襲用一兩稍過度則熇蒸之氣不可衣也

絮征袍 明朝驛使發一夜絮征袍素手抽針冷那堪把剪刀李白吳歌

事於蠶桑 陸宣公奏議衆一其心而專其業供縣絹者則事於蚕桑日作月營皆足供官

衣冷得裝縣 杜甫何氏山林詩

木縣溫軟當縣衣 元稹送崔侍御

爲繪書藏衣絮問 高沐吳元濟拒命師道引兵攻彭城敗蕭沛數縣而還衣緩王師昝爲繪書藏衣絮間使郭航間道走武寧軍

見李愿請奇兵

寒不縣 劉寂妻夏侯廬墓寒不縣

取其調柔 酉陽雜俎納采九物縣取其調柔

◇ 八・一二表 一四四 「將縑比素」の前

肺府 董昌始立生祠刻香木爲軀内金玉紈素爲肺府

寫文選 裴行儉以草隸名家帝嘗以絹素詔寫文選

閨人理紈素 李白擬古詩閨人理紈素遊子悲行役

裂素寫遠意 寄東魯二稚子同上

◇ 九・一八表 一五七 「在野」「野無青草莽」の条

単行本にはこの二条なし。『白氏六帖』から誤入したものである。

◇ 一〇・一〇表 一六六 「玉杯金碗」の前

連雲開甲宅 李白古風中貴多黃金連雲開甲宅

◇ 一〇・一四表 一六八 「七重」の前

粹殞樓下 孔述睿梁侍中孫高祖德紹事竇建德爲中書侍郎嘗草檄毀薄太宗賊平執登汜水樓責曰爾以檄謗我云何對曰

犬吠非其主帝怒曰賊乃主邪命壯士粹殞樓下

◇ 一〇・一四裏 一六八 「五步一樓」の前

平與空等 同上其上則朗出高際平與空等

◇ 一一・四表 一七六 「廣關輔之糴」の前

粟餘於廩 韓文王作舒誌

◇ 一一・四表 一七六 「粟藏九年米」の前

以太倉積粟有餘 歲減漕數十萬石元宗二十五年以後同上志

◇ 一二・九表 一九二 「龍朔元年」の前

貞觀四年 制三品以上紫五品以上緋六品七品綠八品九品青舊志

◇ 一三・二四裏 二二三 「紅琉璃盤」の条、注文が脱漏。

唐杜陽編韋氏諸家好爲葉子戲夜則同昌公主以紅琉璃盤盛夜光珠立堂中光如晝

右に続いて、後条の正文が脱漏。

金大脳盤

「紅琉璃盤」についている唐西陽雜俎云々の注文はこの正文につくものである。

◇ 一五・一三表 二四一 「麴神寅日合」の前

且換金陵酒 解我紫衣裘且換金陵酒同上

◇ 一九・八表 二九九 「每宴自比東」の前

閼兄弟 魏徵隱太子引爲洗馬徵見秦王功高陰勸太子早爲計太子敗王責謂曰爾閼吾兄弟奈何答曰太子蚤從徵言不死今日之禍

◇ 二二・九表 三三七 「窶狹」の前

陰刻の「孔」の字が脱落している。

◇ 二七・二一表 四一〇 「知天」「存存」「形色」の三条
単行本にはない。

◇ 三一・二九裏 四六五 「論心擇術」の条
単行本にはない。

◇ 三五・三〇表 五二〇 「使者屢覘休」の前

捨則崇讎 報爲廢命白居易

未復命於飲冰寧報仇於劊刃 同上

與夫失節 寧其斷恩

これら三条は『白氏六帖』の同じ門「遇讎」の中に見える。

◇ 四〇・七裏 五八五 「慈父」の前

吏民兩懷之 裴守真遷成州刺史不務威嚴吏民兩懷之徙寧州送者千數出境尚不止

- ◇ 四一・三一表 六一三 「謁宰相請移」の後
- 聽自擇官 白居易歲滿當遷帝以資淺且家素貧聽自擇官居易請如姜公輔以學士兼京兆戸曹參軍以使養詔可
- ◇ 四三・一九裏 六三八 「今黃叔度」の前
- 世稱知人 韋夏卿爲政務通理不甚作條教所辟士如路隋張賈李景儉至宰相達官故世稱知人
- ◇ 四三・二三裏 六四〇 「如干將莫耶」の前
- 今之管蕭 張文瓘爲并州參軍李勣嘗歎曰稚圭今之管蕭吾所不及
- 陰刻の「孔」の字はこの条の前にあるべきである。
- ◇ 四六・一三裏 六七七 「峻刑」の門、陰刻の「白」の字は誤り。
- 陰刻の「孔」の字でなければならない。
- ◇ 五〇・一七裏 七三九 「啓封備服以」の前
- 有禮 太夫人以有禮封鄭麗妃神道碑文粹
- ◇ 五一・四表 七四六 「臨軒授鉞」の前
- 宦人統師 李絳初承瓘王承宗議者皆言古無以宦人統師者絳當制書固爭帝不能奪止詔宰相授勅
- ◇ 五一・六表 七四七 「重戎事而肅」の前
- 麾幢節符 獨孤郁與田將軍書天子賞將軍之勳自裨校領七萬軍卒給麾幢節符佩黃金印者數四
- ◇ 五一・八裏 七四八 「臨敵御衆肅」の前
- 吐蕃來請和既宴 使者屢覘休璟后問焉對曰洪源之戰是將軍多殺吾將士其勇無比今願識之后嗟異唐璿
- ◇ 五一・一〇表 七四九 「自稱儒者」の前

李靖 每參議恂恂似不能言以沈厚稱

◇ 五一・一六裏 七五二 「天子無親將」の前

國境不進 杜佑徐州節度使張建封卒軍亂立其子愔請于朝帝不許乃詔佑節度徐泗討定之佑具舨艫遺屬將孟準渡淮擊徐不克引還佑於出師應變非所長因固境不敢進

◇ 五一・一七表 七五二 「凡大將出征」の前

鼓行而進 卿等便須鼓行而進徑入賊界下營從此驅車速圖進取勿使功業歸於別帥爵賞在於他人勉勵壯圖副茲厚遇賜石雄及三軍勅書李德裕一品集

◇ 五一・二二裏 七五四 「短兵」の前

兩刃相嚮 張伯儀李希烈反詔與賈耽張獻甫收安州戰不利伯儀中流矢師却失所持節賊追及奮刀以禦之兩刃相嚮不得下會救至免

◇ 五二・二三裏 七六八 「士夜艾而入」の前

仆旗息鼓 劉蘭爲夏州都督府司馬梁師都以突厥兵頓城下蘭仆旗息鼓賊疑不敢迫夜引去追擊破之
書稱陳姥 杜伏威煬帝遣陳稜以精兵討之稜不敢戰伏威遣以婦人服書稱陳姥怒其軍稜果悉兵至

預秘謀 褚亮授秦王府文學王每征伐亮在軍中嘗預秘謀有裨補之益

方據胡床體胖安餐乾糲 郝處俊高麗叛詔李勣爲涇江道大總管處俊副之師入虜境未陣賊遽至舉軍危駭處俊方據胡床體胖安餐乾糲不顧密 料精銳擊之虜卻衆壯其謀

賊奄至直視無所言 張亮爲平壤道行軍大總管引兵自東萊浮海襲破沙卑城進至建安營壁未立賊奄至亮不知所爲踞胡床直視無所言衆謂其勇

賊夜薄營臥不動 河間元王孝恭輔公柘反爲行軍元帥公柘將馮惠亮等拒險邀戰孝恭堅壁不出遣奇兵絕鉤道賊飢夜薄營孝恭臥不動明日使羸兵扣賊壘挑之

伐謀 李抱真授汾州別駕僕固懷恩反陷焉挺身歸京師代宗以懷恩倚回紇所將朔方兵精憂之召抱真問狀答曰郭子儀嘗領朔方軍人多德之懷恩欺其下曰子儀爲朝恩所殺今起而用是伐其謀兵可不戰解也既而懷恩敗如抱真策

間道出不意 路嗣恭大曆八年嶺南將哥舒晃殺節度使呂崇賁五嶺大擾詔嗣恭兼嶺南節度使嗣恭募勇敢士八千人以流人孟瑤敬冕爲才擢任之使瑤督大軍當其衝冕率輕兵由間道出不意遂斬晃及支黨萬餘築尸爲京觀俚洞魁宿爲惡者皆族夷之

以衆則不足以謀則多 李晟大曆初李抱玉署晟右軍將吐蕃寇靈修抱玉授以兵五千擊之辭曰以衆則不足以謀則多乃請千人繇大震關趨臨洮屠定秦堡執其帥慕容谷鍾虜乃解靈州去

先計後戰 馬燧贊曰唐史臣稱燧沈雄忠力常先計後戰

鐵鑕維車 馬燧田悅反進兼魏博招討使李納李惟岳合兵萬三千人救悅悅哀散兵二萬壁洹水淄青軍其左恒冀軍其右燧進屯鄴請益兵詔河陽李凡以兵會次于漳悅遣將王光進以兵守漳之長橋築月壘扼軍路燧於下流以鐵鑕維車數百絕河載土囊遏水而後度

繫獄更召問計 孫儒景福元年儒復圍宣州屯陵楊行密戰不利謀出奔時劉威方繫獄且死行密窮更召問計對曰儒焚倉隕壘以來糧盡將爲我擒若勁兵背城坐制其困李神福亦請據險邀儒糧行密乃分兵攻廣德壁而絕饗道軍適大疫儒病店遣建鋒殷鈔諸縣行密知城下兵寡乃晨出率安仁義顏背城決戰破五十壁會暴澍且冥儒軍大敗儒病甚殷弁不能與顏執儒獻行密諸將皆降儒就刑于市見劉威曰中君之謀

立幟解甲兵莫敢嚮 田頔神福請行密以兵塞顏走道仁義焚東塘戰艦夜攻常州不克轉戰至夾崗立二幟解甲而息追兵莫

敢嚮

宿將多謀

行密召其將臺濛泣語曰人嘗告額必反我不忍負人額果負我吾思爲將者非公莫可濛頓首謝率騎渡江爲陣以

行士笑其怯濛曰額宿將多謀備之何害

願假壯騎縛安守忠等

僕固懷恩廣平王爲元帥使懷恩統回紇兵從王戰香積寺北賊大崩敗會日暮懷恩見王曰賊必棄城

走願假壯騎二百縛安守忠李歸仁等致麾下王曰將軍戰疲且休矣迨明與將軍圖之對曰守忠等皆天下驍賊驟勝而敗北天與

我也奈何縱之使復得衆必爲我患雖悔無逮王不從固請通夕四王反遲明謀者至守忠等果遁去

◇ 五三・二八裏 七八七 「逗留其兵」の後

緩當自攜貳

郭子儀吐蕃豆紇入寇虜寇邠州先驅至奉天諸將請擊之子儀曰客深入利速戰彼下素德我吾緩之當日攜貳

因下令敢言戰者斬堅壁待之賊果遁

堅營蓄銳以挫其鋒

武德初劉武周據太原使其將宋金剛屯於河東太宗往征之謂諸將曰金剛懸軍千里深入吾地精兵驍

將皆在於此意在速戰我堅營蓄銳以挫其鋒分兵汾濕衝其心腹彼糧盡計窮自當遁走當待此機未宜速戰通典

逗留沮事

劉昌詔以宜武兵八千北出五原士卒有逗留沮事者斬三百人乃行舉軍懼伏

不時上功

庚承訓拜徐泗行營都招討使討龐勛宰相路巖韋保衡劾承訓討賊逗留貪虜獲不時上功貶蜀王傳

封刀趣進

第五琦太守賀蘭進明安祿山反進明徙北海奏琦爲錄事參軍時賊已陷河間信都進明未戰玄宗怒遣使封刀趣

之曰不亟進兵即斬首進明懼不知所出琦勸厚以財募勇士出賊不意如其計復收所陷郡

按兵未前

魏元忠徐敬業舉兵詔元忠監李孝逸軍至臨淮而偏將雷仁智爲賊敗孝逸懼其鋒按兵未敢前元忠曰公以宗室

將天下安危繫焉海內承平久聞狂狡竊發皆傾耳翹心以待其誅今軍不進使遠近解情萬有一朝廷以他將代公且何辭孝逸然

之乃部分進討

恣橫逗撓

郗士美充昭義節度使討王承宗遣大將王獻督萬人爲前鋒獻恣橫逗撓士美即斬以徇

緩師示弱

符存審督軍屯朝邑諸將皆欲速戰存審曰使梁軍知吾利於速戰則將來渭而營斷我餉道以持久困我則我進退

不可敗之道也不若緩師示弱伺隙出奇可以取勝乃按軍不動五代史

過爲謹重漸失事機

贊皇一品集請賜劉沔詔訪聞劉沔頗練邊事惟臨機策不免遲疑兵書云兵聞拙速不聞巧遲深恐過爲

謹重漸失事機比緣回鶻未爲侵擾且務綏懷今既殺戮邊人驅劫牛馬已有詔速令驅徐自得便宜臨機制變不得過有疑慮皆待

朝廷指揮

逗留持疑竟不時進

陸宣公奏議陛下推誠允迪厚賂招徠逗留持疑竟不時進無濟討除之用但攜將帥之心賀吐蕃抽軍回

狀

萬一獸駭致損更多

張曲江集勅張守珪林闡山深恃不存之地萬一獸駭致損更多以此思之固宜且守伺其有隙乘便剪除

不務疾雷先奮

卿不務疾雷先奮乃欲以歲月勝微凡爲將帥孰不樂此豈祭遵之安重致樂伯之遷延一品集賜劉茂文詔

制置太遲

臣伏觀叛亂之地皆是制置太遲及朝廷徵發賊已處處設備兵法云疾雷不及掩耳又云用兵只聞拙速不聞巧遲

去春楊弁便是速討之力旬月而平望賜王宰等密詔令城下選擇四千人縱橫排比如已聞亂不要更待詔旨令一千人守石會關

三千人守儀州路把截贊皇一品集論路府事宜狀

◇ 五三・二八裏 七八七 「告師期」の前

以紙爲風鳶過營上

藩鎮田悅叛攻臨洺將張伾固守有詔河東馬燧河陽李元與昭義軍救伾三節度次狗明二山間未進

急以紙爲風鳶高百餘丈過悅營上悅使善射者射之不能及燧營譟迎之得書言三日不解臨洺士且爲悅食燧乃自壺關鼓而東

破盧曠戰雙岡禽賊大將盧子昌而殺朝光悅遁保洹水

◇ 五七・六裏 八二九 「若無儲蓄是」の前

今當歲稔令益軍儲 同上今當歲稔令益軍儲反磬聚蓄之資用供朝夕之用儻遇災難則如之何

◇ 五七・二四表 八三八 「阿保機」の前

名王貴種 藩鎮張仲武傳回鶻遂衰名王貴種相繼降補幾千人

◇ 六二・一九裏 九一一 「東方西方磬」の後

設歌鍾歌磬於壇上 磬簾在西已上樂縣之制

朝會加鍾磬十二 同上

登歌鍾磬各一 同上

泗濱浮石裁爲磬 元稹華原磬泗濱浮石裁爲磬古樂疎音少人聽工師小賤牙曠稀不辨邪聲嫌雅正

伯夔曾撫野獸馴仲尼暫和春雷盛 同上

叩之聲極清越 江南遺事李建勳蓄一玉磬尺餘以沈香節安柄叩之聲極清越客有談及俚俗之語者則急起擊磬於耳或問

之對曰聊代洗耳目磬爲泗濱友

善擊磬 太真妃多能曲藝最善擊磬拊搏之音出開天記

◇ 六二・二〇裏 九一二 「通氣」以下「曾城之匏」まで

これらの六条は、単行本には見えない。単行本には次の一五条が載せられている。

瓢箪 南詔吹瓢箪笙四管酒至客前以笙推盞勸酬

笙笛應奏 韋縚請宗廟籩豆皆加張均韋述議曰以今之珍生所嗜愛求神無方是韶濩可抵而箏篴笙笛應奏

巢大笙和小笙 樂志八音七曰匏爲笙爲巢巢大笙也爲和小笙也

吹笙佐酒 後唐莊宗皇后劉氏晉王攻魏掠成安裨將袁建豐得后納之晉宮貞簡太后教以吹笙莊公已爲晉王太后幸其宮

太后歆甚命劉氏吹笙佐酒

鳳笙篇 仙人十五愛吹笙學得崑丘彩鳳鳴李白

別調流纖指 欲嘆離聲發絳唇更嗟別調流纖指同上

重吟真曲和清吹却奏仙歌響綠雲 同上

玉笙 紫陽之真人邀我吹玉笙滄霞樓上動仙樂嘈然宛似鸞鳳鳴憶舊遊

竹叢比於外 李周翰文選注攢羅謂以竹叢比於外而行列之也

常使家僮奏之 李群玉好吹笙常使家僮奏之故盧肇送詩云妙吹應諧鳳南部新書

紫鸞笙 兩兩白玉童雙吹紫鸞笙李白古風

叢霄之笙謝玄卿遇神仙吹叢霄之笙續仙傳

帳底吹笙煙霧濃 李賀奏宮詞

人傳有笙鶴時遇此山頭 玉臺觀杜甫詩

笙和簫篴塤一在堂下 樂志

◇ 六二・二三表 九一三 「細器」以下「問笙簞」まで

これらの五条は単行本には見えない。単行本には次の八条が載せられている。

吹簫乘寓鶴裴回庭中 張易之輕薄者又諂言昌宗乃王子晉後身后使被羽裳吹簫乘寓鶴裴回庭中如仙去狀

白玉簫管 明皇雜錄云安祿山自范陽入覲獻白玉簫管數百事皆陳於梨園

雲韶簫一 雲韶樂有簫一樂志

綵簫 人吹綵簫去天借綠雲迎李白鳳臺曲

吹簫舞彩鳳 擬古同上

嬴女吹玉簫吟弄天上春 青鸞不獨去更有攜手人同上

案設簫笳皆二 樂志樂縣之制案設簫笳皆二

八曰竹爲簫爲管 爲簾爲笛爲舂牘上

◇ 六二・二三裏 九一三「隨歌」以下「水中龍應行」まで

これらの九条は単行本には見えない。単行本には次の十八条が載せられている。

臥吹 讓皇帝子瑀亦知音嘗早朝過永興里聞笛音乃曰何故臥吹笛

善笛者請爲重職 盧坦李復爲鄭滑節度使表爲判官有善笛者大將等悅之詣復請爲重職坦笑曰大將久在軍積勞亟遷乃

及右職奈何自薄欲與吹笛少年同列邪

笛工歌女 南詔異牟尋冊爲南詔王以祠部郎中袁滋持節有笛工歌女皆垂白視滋曰此先君歸國時皇帝賜胡部龜茲音聲

二列今喪亡略盡唯二人故在

善吹橫笛 樂志寧王善吹橫笛

玉笛吹涼州 明皇雜錄上初自蜀回召梨園弟子乘月登樓左右惟力士及故貴妃侍者紅桃在焉遂命歌涼州涼州即貴妃所

製上親御玉笛爲之倚曲曲罷相視掩泣

煙竹笛 李肇國史補李舟好事嘗得村舍煙竹截以爲笛緊如鐵石以遺李牟吹笛天下第一月夜泛舟與舟人吹之寥亮逸

發俄有客立於岸呼舡請載既至請爲吹其聲清壯山石可裂矣平生未嘗見及入破呼吸盤礴愁聲粉碎客散不知所之舟疑其蛟

龍也

龍鳳吟 蜀歐陽迥性坦率好長笛雖秉國政每休沐在第時爲龍鳳吟一兩弄而神色閑暢尤爲自得出九國志

波濤汹涌

呂筠卿月夜泊君山飲酒吹笛忽一漁舟來相竝中有一老人持笛以示呂大者如合拱曰此天樂也不可吹小者如筆管曰此人間之笛遂吹其小者始一兩聲波濤汹涌又三五聲舟楫掀舞呂大恐老人止笛朗吟曰湘中老人讀黃老手援紫龜坐碧草春至不知湖水深日暮忘却巴陵道忽不見廣異記

謫仙怨

明皇幸蜀妃子既死一日登高山望秦川謂高力士曰吾取張九齡言不至此遣使祭之馬上吹笛爲曲號謫仙怨出劇

談錄

笛奏梅花曲

李白從軍行

三年笛裏關山月

杜甫洗兵馬行

橫吹

石門宴集晚來橫吹好泓下亦龍吟

愁連吹笛生

泛江同上

清霄近笛床

同上

檀的深時痕半月落梅飄處響穿雲

杜牧寄張舍人笛

許雲封驗笛

甘澤謠許雲封善笛自云學於外祖李牟韋應物守任城見之示以家藏古笛曰天寶中得於李供奉者雲封熟視

曰此非外祖所吹笛也公問何以驗之答曰取竹之法以今年七月望前生者明年七月望前乃採過期則音窒不及期則音浮浮者外澤中乾受氣不全則其竹夭此笛竹之夭者遇至音必破令試吹之雲封舉笛吹六州遍一疊未盡笛忽中裂公異之

飛聲

李白聞笛誰家玉笛暗飛聲散入春風滿洛城

李暮壓笛傍宮牆偷得新翻數般曲

元稹連昌宮詞

◇ 六二・二四裏 九一四 「笛吟」の前

朝會設笛二

樂志若朝會則設歌簫笛皆二

歎以清笳 楊炎平胡頌

壯士歌 西陽雜俎有僧超能吹笳爲壯士歌項羽吟將軍崔延伯出師每臨敵令僧超爲壯士聲遂單馬入陣

鳴笳 不然鳴笳按鼓戲滄流呼取江南兒女歌棹謳李白贈韋南陵

亂動天山月 鳴笳亂動天山月王維

悲笳數聲動 令嚴夜寂寥悲笳數聲動杜甫後出塞

哀笳 動幽咽杜詩

◇ 六四・一五表 九三五 「身爲治喪」の条、注文が脱漏。

何蕃居太學二十年有死喪無歸者皆身爲治喪

右に続いて、後条の正文が脱漏。

丐貸營喪

「身爲治喪」についている李白上安州裴長史書云々の注文は、この正文につくものである。

◇ 六五・二三表 九四九 「給儀仗」の前

遷墳墓 張茂昭表遷墳墓于京兆許之

◇ 七二・二裏 一〇三〇 「吏部尚書」の条

単行本の正文は量資而任之までである。注文は左のようである。

百官志

量資而任之に続く正文の其屬有四一曰云々から、注文の終わりまでの部分は、単行本と異なる。単行本は次のようである。

吏部郎中 掌文官階品朝集祿賜給其告身同上

武德五年改選部曰吏部龍朔元年改吏部曰司列武后光宅元年改吏部曰天官天寶十一載改吏部曰文部至德二載復舊同上

司封 郎中一人員外郎一人掌封命朝會賜予之給凡爵九等龍朔元年改主爵曰司封

司勳 掌官吏勳級諸州授勳人歲第勳之高下三月一報戶部同上

考功 掌文武百官功過善惡之考法及其行狀若死而傳於史官謚于太常則以其行狀龍朔元年改考功曰司績

時以寡學爲訾 戴胄檢校吏部尚書然好抑文雅獎法吏時以寡學爲訾

極諫 溫璋加檢校吏部尚書同昌公主薨懿宗誅醫無狀者繫親屬一百餘人璋與龍瞻極諫貶振州司馬

所薦四十人皆知名 杜淹檢校吏部尚書參豫朝政所薦四十人皆知名傳二十

爲循資格 裴光庭兼吏部尚書初吏部求人不以資考爲限所獎拔惟其才往往得俊之士亦自奮其後士人猥衆專務趨競

銓品枉撓光庭懲之因行儉長名榜乃爲循資格無賢不肖一據資考配擬又促選限盡正月任門下省主事閭麟之專主過官凡麟之裁定光庭輒然可時語曰麟之光庭手

銓總平允 宋璟睿宗立以吏部尚書同中書門下□品先是崔湜鄭愔典選爲寂近于奪至迎用二歲闕猶不能給更置□□□

流品淆并璟與侍郎李乂盧從愿澄革之銓總平允四十九（□四字破損）

臨問試驗良 趙宗儒改吏部尚書穆宗立詔先朝所召賢良方正委有司試宗儒建言應制而來者當天子臨問試有司非國舊

典請罷之詔可

爲手籍驗實 王徽復授吏部尚書是時銓選失序吏肆爲姦補調重複不可檢徽爲手籍一驗實之遂無姦滯

冠六卿統百職 白居易蕭俛吏部尚書制是用正命爲選部尚書而冠六卿統百職

侍郎寡術不能厭衆 温彦博寡術不能厭衆訟牒滿庭時譏其煩碎

處事精明 姜晦爲吏部侍郎主選曹吏嘗請託爲姦前領選者周棘扈藩檢室内外猶不禁晦悉除之示無防限然私相諉屬罪輒得皆以爲神始晦革舊示簡廷議恐必敗既而贓賂路塞而流品有叙衆乃伏

自永徽後選員浸多 李敬元同東西臺三品兼檢校司列少常伯時員外郎張仁禕有敏才敬元委以曹事仁禕爲造姓曆狀式銓簿鉗鍵周密病心大勞死敬元因其法衡綜有序自永徽後選員外多惟敬元居職有能稱性強記雖官萬員遇諸道未嘗忘姓氏有來訴者口諭書判參舛及殿最本末無少繆天下伏其明列傳三十一

官無滯人 劉林甫歷吏部侍郎唐沿隋制十一月選集至春停日簿事叢有司不及研諦林甫建言四時聽選隨到輒擬於是官無滯人

隨才銓錄 劉祥道父林甫歷吏部侍郎始天下初定州府及詔使以赤牒授官至是罷悉集吏部調至萬員林甫隨才銓錄咸以爲宜

◇ 七五・一九表 一〇七六 「左庶子掌侍」の条、注文が脱漏。

百官志

右に続いて、後条の正文が脱漏。

建議七廟

「左庶子掌侍」についている于志寧加常侍云々の注文は、この正文につくものである。

◇ 七六・一裏 一〇八〇 「留守」の門

陰刻の「白」の字は、「孔」の字の誤り。

◇ 八一・一六表 一一六四 「歳四熟」の前

歲熟 那揭產鬱金稻歲熟

◇ 八四・二〇表 一二〇三 注文「計帝召至便」の前

明刊本は一九葉と二〇葉の間に脱漏がある。「利」の門の初めの部分は以下のごとくである。

權萬紀 帝讓曰以利規我見金治門

言利 崔群是時皇甫鎔言利幸於帝陰藉左右求宰相群數言其佞邪不可用

世訾其嗜利 裴冕領使既衆吏白俸簿月二千緡冕顧視喜見顔間世訾其嗜利

柄鑿萬端 高適出蜀彭二州刺史始上皇東還分劍南爲兩節度百姓弊于調度而西山三城列戍適上疏曰劍南雖名東西川

其實一道自邛關黎雅以抵南蠻由茂而西經羌中平戎等城界吐蕃瀕邊域皆仰給劍南異時以全蜀之饒而山南佐之猶不能舉

今列梓遂等八州專爲一節度歲月之計西川不得參也嘉陵比困夷獠日雖小定而瘡痍未平耕紡亡業衣食貿易皆資成都是不

可得役亦明矣可稅賦者獨成都彭蜀漢四州而已以四州耗殘當十州之役其弊可見而言利者柄鑿萬端窮朝抵夕千按百牘皆

取之民官吏懼譴責及鄰保威以罰挾而逋逃益滋

劉晏四利 劉晏乃移書於宰相元載以爲大抵運之利與害各有四京師三輔苦稅入之重淮湖粟至可減徭賦半爲一利東都

凋破百戶無一存若漕路流通則聚落邑廛然可還定爲二利諸將有不廷戎虜有侵盜聞我貢輸錯入軍食豐衍可以震耀夷夏爲

三利若舟車既通百貨雜集航海梯嶠可追貞觀永徽之盛爲四利

誘人 陸贄奏立國惟義與權誘人惟名與利名近虛於教爲重利近實於德爲輕

責臣以利 裴諝拜河東塩鐵使時關輔旱諝入（この後に、計帝召至便云々の注文が続く。）

◇ 八五・九表 一二〇八 「宵田爲獠」「火田爲狩」「履獲」の条

この三条は、単行本に見えない。

◇ 八六・一四表 一二二二「崇巖峭壁」の後

言而不能文非君子之儒也 文而不知道亦非君子之儒也逮德下衰其文漸替惜乎王公大人之言而溺於淫麗恠誕之說非文之罪也爲文者之過也善爲文者發而爲聲鼓而爲氣直則氣雄盛精則氣生使五彩並用而氣行於其中故虎豹之文蔚而騰光氣也日月之文麗而成章精也文粹柳冕書

蘇李 蘇味道能屬辭與里人李嶠俱以文翰顯時號蘇李

得中和之氣 唐許景先張說曰許舍人之文雖乏峻峯激流然詞旨豐美自得中和之氣

清文煥皇猷 韓文

屬文敏甚 胡楚賓

◇ 八六・一四裏 一二二二「述作」の門

明刊本は孔氏六帖からの引用が脱漏している。

著女則十篇 太宗皇后長孫氏嘗采古婦人事著女則十篇

著書百餘篇 張太素歷東臺舍人兼修國史著書百餘篇

太和通選 裴潏嘗哀古今辭章續梁昭明太子文選自號太和通選上之

大述作多出其手 張說朝廷大述作多出其手

西域圖記 裴矩煬帝時西域諸國悉至張掖交市帝令矩護視矩知帝勤遠略乃訪諸商胡國俗山川險易撰西域圖記三篇

弄筆生 祖君彥爲李密草檄時郎將王拔柱曰郎筆生有餘罪乃蹙其心即死

撰次禮論 李敬玄撰次禮論及它書數十百篇

裴行儉 所撰選譜草字雜體數萬言又爲營陣部伍料勝負別器能等四十六訣武后遣武承嗣就第取去不復傳

韓皐 父喪德宗遣使弔問俾論議滉行事號泣承命立草數千言以進帝嘉之

著家傳十篇 李繁下獄著家傳十篇

取貴於後 柳宗元曰賢者不得志於今必取貴於後古之著書者皆是也答許京兆

不爲諸儒稱道 王績兄通隋末大儒也倣古作六經又爲中說以擬論語不爲諸儒稱道故書不顯惟中說獨傳

多所論議 陸龜蒙居松江甫里多所論議雖幽憂疾痛貲無十日計不少輟也文成竄篋中或歷年不省爲奴事者盜去

條彙粗立 徐堅與徐彥伯劉知幾張說與修三教珠英時張昌宗李嶠總領彌年不下筆堅與說專意撰綜條彙粗立諸儒因之

乃成書

王元感 所撰書糾謬春秋振滯禮繩衍等凡數百篇

撰百家類例 孔至明氏族學與韋述蕭穎士柳沖齊名撰百家類例以張說等爲近世新族剝去之說子伯方有寵怒曰天下族

姓何豫若事而妄紛紛邪伯弟素善至以實告初書成示韋述述謂可傳及聞伯語懼乃欲更增損述曰大丈夫奮筆成一家書奈何

因人動搖有死不可改

王勃 九歲得顏師古注漢書讀之作指瑕以擿其失

著五悲文 盧照隣后封嵩山屢聘賢士已已廢著五悲文以自明

撰女誠 韋澄撰女誠傳于時

李邕 父善始善注文選釈事而忘意書成以問邕邕不敢對善詰之邕意欲有所更善乃曰試爲我補益之邕附事見義善以其

不可奪故兩書並行

蕭存 顏真卿在湖州與存及陸鴻漸等討摭古今韻字所原作書數百卷

三足記 盧景亮嘗謂人君足食足兵而又得士天下可爲也乃興軒頊以來至唐剏治道之要著書上下篇號三足記又作答問

言輓運大較及陳西戎利害切指當世公卿伏其達古今云

寫宣 王起帝常以疑事令使者口質起具牒子附使者上凡成十篇號曰寫宣它撰集亦多

韋澳 宣宗嘗曰朕每遣方鎮刺史欲各悉州郡風俗者爲朕撰一書澳乃取十道四方志手加編次題爲處分語後鄧州刺史薛

弘宗中謝帝敕戒州事人人驚服

于邵 知制誥朝有大典册必出其手

言典事該 鄭虔嘗爲天寶軍防錄言典事該諸儒服其善著書

群書理要 太宗欲見前代帝王行事得失以爲鑒戒魏徵乃與虞世南等採經史百家善言嘉話明主暗君之迹爲五十卷號群

書理要上之太宗手詔覽所撰書博而且要出大唐新語

撰集要事以類相從 太宗謂張說兒子等欲學綴文卿等與諸學士撰集要事以類相從說與徐堅等編比進上詔以初學記爲

名其書盛行於世出大唐新書

撰元倉子 大唐新書道家有庚桑子代無其書開元末襄陽處士王源撰元倉子兩卷以補之源爲之序云莊子謂之庚桑子史

記作元倉子列子作元倉子其實一也

我志在刪述垂輝映千春 晞聖如有立絕筆於獲麟李白古風

文書自傳道 奚仗史筆垂韓愈寄崔立之

供醬蒙藥褚 躬曬書于庭得已書四十通適爾自晒曰道不可益惡用是空文爲真可供醬蒙藥褚禹錫劉氏集略

治書蒼頭吟諷 文粹柳宗元答人求文章書往僕所著合爲一通想令治書蒼頭吟諷擊轅拊缶必有所擇

漁歌樵唱皆傳述作 柳三復謂李德裕漁歌樵唱皆傳述作瑣言

◇ 八六・一五表 一二三二「元和體」の前

奪袍 宋之問武后遊洛南龍門詔從臣賦詩左史東方虬詩先成后賜錦袍之間俄頃獻后覽之嗟賞更奪袍以賜

窮歷剡溪山置酒賦詩 宋之問改越州長史窮歷剡溪山置酒賦詩流布京師人人傳諷

沈宋 宋之問建安後訖江左詩律屢變至沈約庾信以音韻相婉附屬對精密及之問沈佺期又加靡麗回忌聲病約句準篇如

錦繡成文學者宗之號爲沈宋

綺錯婉媚謂上官體 上官儀工詩其詞綺錯婉媚及貴顯人多效之謂爲上官體

海內文宗 陳子昂初爲感遇詩三十八章王適曰是必爲海內文宗乃請交

在席皆服 褚亮年十八詣陳僕射徐陵陵與語異之後主召見使賦詩江總諸詞人在席皆服其工

歌詠自適 楊師道工詩每與有名士燕集歌詠自適帝見其詩爲擿諷嗟賞後賜宴帝曰聞公每酣賞捉筆賦詩如宿構者試爲

朕爲之師道少選輒成無所竄定

侍宴賦詩 杜淹嘗侍宴賦詩尤工

賦詩悼痛 魏徵亡帝賦詩悼痛

緩轡諷詩 崔湜嘗暮出端門緩轡諷詩張說見之嘆曰文與位固可致其年不可及也

宮體詩 虞世南帝嘗作宮體詩使賡和世南曰聖作誠工然體非雅正上之所好下必有甚者臣恐此詩一傳天下風靡不敢奉

詔帝曰朕試卿耳

樵斲能諷 李百藥詩尤其所長樵斲皆能諷之

著先德詩四章 韋濟著先德詩四章世服其典懿

雞林售 居易最工詩初頗以規諷得失及其多更下偶俗好至數千篇當時士人爭傳雞林行賈售其國相率篇易一金甚偽者

相輒能辨之

從獵渭川獻 魏知古先天元年爲侍中從獵渭川獻詩以諷

詩人之冠冕 席豫帝嘗登朝元閣賦詩群臣屬和帝以豫詩最工詔曰詩人之冠冕也

爲唐詩 宗室戡常惡元和元白詩多纖艷不逞而世競重之乃集詩人之類夫古者斷爲唐詩以譏正其失云

天格瞻麗 鄧世隆初太宗以武功定天下晚始嚮學多屬文賦詩天格瞻麗意悟冲邁十三年世隆上疏請加集錦帝謙不許

◇ 八七・二四表 一二三九 「歲月往矣」の前

明刊本は陰刻の「孔」の字を欠いている。

◇ 八八・一七表 一二四八 「改頗爲陂」の前

叙帝王之書首堯舜之典 文粹蕭穎士進續尚書伏羲創文籍黃帝立史官太古淳奧權輿朴略至陶唐氏而後大備故孔子美之曰堯之爲君也煥乎其有文章由是叙帝王之書首堯舜之典於堯則曰欽明文思於舜則曰誕敷文德夏之興也泣辜殊於至理商之興也慙德乖於雅樂周之興也謂式微於盡善其不爲帝典宜矣

記言 文粹陸龜蒙論文書則記言之史也

書以紀帝王遺範 六典

非聖人之刪書夏商之道微矣 文粹常仲孺文宣王廟碑

◇ 八八・一七表 一二四八 「改頗爲陂」の条

単行本にはない。

◇ 八八・一七裏 一二四八 「糾謬」の後

作禹誥 禹賢益以天下授益采其謳謠之所歸卒讓于啓而書無典訓黯追其旨作禹誥陳黯

◇ 八八・一八表 一二四八 「易」の門、「七十六家」から「膚末於學」までの六条

これらは単行本にはない。単行本には次の一七条を載せている。

疏易五義 李訓遷易博士以王守澄進帝慮官人猜忌乃疏易五義示群臣有能異訓意者賞欲天下知以師臣待訓

授易 唐休璟授易於馬嘉運

韋顗 所著易蘊解推演終始有深誼

韓滉 善治易

請存王弼學 劉知幾易無子夏傳請存王弼學

爲圖 高定長通王氏易爲圖合八出上圓下方七轉而六十四卦備

舉治易 康子元仕歷獻陵令開元初詔中書令張說舉能治易老莊者集賢直學士侯行果薦子元及平陽敬會真於說說藉以

聞並賜衣幣得侍讀

作易發揮數篇 王勃嘗讀易夜夢若有告者曰易有太極子勉思之寤而作易發揮數篇至晉卦會病止

陸希聲 通易

易奇而法 韓愈進學解曰易奇而法

伏羲兆亂 文粹王績負苓者傳文中子講道於白牛之溪程生退省于松下語及周易薛収嘆曰不及伏羲氏乎何詞之多也俄

而有負苓者皤皤然委檐而息曰吾子何嘆也薛生曰易者道之蘊也伏羲畫卦而文王繫之不逮省文矣以爲文王病也負苓者曰

文王焉病伏羲氏病甚者也伏羲氏洩道之密漏神之幾分張大和礫裂元氣則伏羲氏始兆亂者安得羸嘆而嗟文王

善言象而識物情 同上

易聖 隱逸衛大經邃于易人謂之易聖

易有陸德明 徐曠傳

讀易二字 江南伍喬入廬山白鹿洞聽讀忽一夕至夜央有大掌自牖而入其指紫黑且毫可與桷敵中有文云讀易二字喬不懼乃授筆於下書曰喬知之遂窮爻象畢究其微至造次顛沛必於是江南野史

易以紀陰陽變化 唐六典

非聖人之作易義農之道消矣 文粹常仲孺夫子廟碑

六丁取文去 龍城錄上元中台州有道士王遠智善易於觀感間曲盡其妙善知人生死禍福作易總十五卷世秘其本一日曝書雷雨忽至陰雲騰沓直入臥內雷隱隱然赤電遶空六丁取文去

◇ 八八・一九裏 一二四九 「實辭」「振滯」の二条

単行本はこの二条を欠き、次の五条を載せる。

發春秋題 徐曠明左氏春秋爲國子博士高祖幸國學觀釋奠文遠發春秋題論難鋒生隨方占對莫能屈帝異之

願讀它書 孝敬皇帝弘顯慶元年立爲皇太子受春秋左氏於卒更令郭瑜至楚世子商臣弑其君喟而廢卷曰聖人垂訓何書

此耶瑜答曰聖人作春秋善惡必書褒善以勸貶惡以誡故商臣之罪雖千載猶不得滅弘曰然所不忍聞願讀它書

馬周 善春秋

裴炎 尤通左氏春秋

陸希聲 通春秋

◇ 九二・四裏 一二九九 「諂佞」の門、「素議所斥」の前

陰刻の「孔」の字が脱漏。その後、次の条が続く。

阿邑順旨 王世充出爲江都贊治遷郡丞煬帝數南幸世充善伺帝顏色阿邑順旨性機巧飾臺沼陰奏遠方珍物以媚帝帝愛昵之

魏徵曰 由待下之情未盡誠信雖有善始之勤而無克終之美故使佞之徒得肆其巧謂同心爲朋黨告訐爲至公彊直爲檀權忠讜爲謗誹

撓意諧媚 李迥秀同鳳閣鸞臺平章事張易之兄弟貴驕因撓意諧媚士論頓減

挾數刺人主意 封倫資險佞內挾數刺人主意陰導而陽合之

諂諛阿匱 蕭復盧杞對上或諂諛阿匱復厲言杞辭不正帝色貽謂左右曰復慢我

纖佞 蕭俛西川節度使王播賂權幸求宰相俛劾播纖佞不可汚台宰

巧諛無耻 楊再思昌宗以姿貌幸再思每曰人言六郎似蓮華非也正謂蓮華似六郎耳其巧諛無耻類如此

自署皇后阿箸 竇懷貞自署皇后阿箸見繼室門

傾已附離 方太平公主干政懷貞傾已附離日視事退輒詣主第刺取所欲時語曰前作后國箸後爲主邑丞言事公主如邑官

屬也

諷陳符命媚帝 宗楚客冒干權利嘗諷右補闕趙延禧陳符命以媚帝

亂常改作 祝欽明景雲初侍御史倪若水劾奏欽明山暉等腐儒無行以諂佞亂常改作

佞敏 虞世基佞敏

玩禁中樹從旁美歎 宇文士及帝嘗玩禁中樹曰此嘉木也士及從旁美歎帝正色曰魏徵常勸我遠佞人不識佞人爲誰今乃

信然謝曰南衙群臣面折廷爭陛下不得舉手今臣幸在左右不少有將順雖貴爲天子亦何聊帝意解

阿匱取容 楊再思居宰相十餘年阿匱取容無所薦達

上周受命頌 陳子昂后既稱皇帝改號周子昂上周受命頌以媚悅

◇ 九三・三裏 一三一二「或至言詰」の前

汝欲賣國者 楊渥嗣立召周隱罵曰汝欲賣吾國者復何面目見楊氏乎遂殺之同上

◇ 九三・一四表 一三一七 「縮頸羞汗」の前

深自羞汗 張玄素始玄素與孫伏伽在隋皆爲令史太宗問玄素官立所來深自羞汗

◇ 九六・一二裏 一三六三 「閑厩馬萬疋」の前

以中官爲内飛龍使 以殿中丞檢校仗内閑厩以中官爲内飛使同上

◇ 九七・八裏 一三七三 「頃有至自南」の前

虞世南師子賦 其爲狀則筋骨糾纏殊姿異□闊臆脩尾勁毛柔毳鉤爪鋸牙藏鋒畜銳弭耳宛足伺間借勢暨乎奮鬣舐脣倏來忽往瞋目電躍發聲雷響拉虎吞貔裂犀分象踐籍則林麓摧殘哮呼則江河振蕩(□一字判讀不能)